

経済記者の 会川鉄工訪問

国内で唯一、風力発電の風車を支えるタワー部分を製造している、いわき市の金属加工工業・会川鉄工。常磐炭鉱の閉山、東日本大震災に伴う津波、東京電力福島第一原発事故と、存続の危機に直面する産に新しいものづくりへとかじを切ってきた。

いわき市のいわき四倉中核工業団地の工場で、タワー部品を造っている。こぼは昨年6月に稼働したばかりの、国内初となるタワー専用工場。約1万8千平方メートル敷地内の至る所に鋼材の出荷が並ぶ。大型のものでは直径4・3メートル。この筒だけを見ると「一体何を造っているのだろう」と不思議な感覚に陥る。

石炭産業が盛んだった1946(昭和21)年、同市四倉町で製鉄や鋳鉄を生産・販売する「会川鉄工所」として創業。石炭を運ぶトロッコの中輪や石炭を保管する貯蔵庫の製造を手掛けていたが、エネ

Q2

ルギー革新で60年代から需要は減り、76年に炭鉱は閉山。その後は火力発電所向けのタンクや配管の製造に移行、80年ごろからは原発向けに放射性廃棄物を入れる遮蔽容器などを製造するようになった。

「これから10年は忙しくなる。原発関連の製品をどんどん世界に輸出していく」。2011(平成23)年1月、都内で開かれた原発関連メーカーの集会で、会川文雄社長(70)は関連企業代表のあいさ

つを聞き、「しばらくは安泰だ」と確信した。その2カ月後、原発事故が起きた。津波で工場が冠水、受注した製品はキャンセルが相次いだ。原発に代わる新たな仕事を模索する中、高い溶接技術を

風車支える唯一の技術

会川鉄工 (いわき市)

金属加工業

国内で唯一製造している風車を支えるタワーを紹介する会川社長



- ◇所在地 いわき市四倉町上仁井田字東山46(本社)
いわき市四倉町芳ノ沢1の30(第2タワー工場)
- ◇創業 1946(昭和21)年
- ◇従業員数 約100人
- ◇事業内容 風力発電タワー、原発用遮蔽容器、火発用大型タンクなどの製造

データ

生かして郡山市の産業技術総合研究所福島再生可能エネルギー研究所に設置される風車のタワー部分の製造を請け負い、完成させたことを機に、タワー製造に参入した。

これまでに国内外に送り出したタワーは小型と中型を合わせて200基以上。「技術を持つ企業は県内に多くあるが、新産業では尻込みして技術を生かし切れていない。私たちが先頭に立ち、『福島県と言えは風力産業』となるよう広げていきたい」。未来を見据えて挑戦を続ける会川社長に、「フラガール」を生んだ炭鉱の街に息づく底力を見(今泉桃佳)